



そして物語に出てきた吉備海部は海人として、  
港湾管理や軍兵・物資等の輸送に当ったものと  
考えられ、その根拠地は邑久郡南部地方、とく  
に牛窓周辺とみられている。

また、古代の航路は播磨灘から邑久の海岸沿  
いに西下し、今の児島半島（当時島）の北側  
の海域を通過して水島灘へ出て備後の鞆へと向う  
コースであったように、吉備の海岸沿いは当時  
の主航路に当り、大和と九州との間の要衝の地  
であったといえる。

五世紀後半、皇位継承争いにかかわる星川皇  
子の乱では、吉備氏一族は軍船四十隻を仕立て  
て星川皇子の援軍として難波に急行しているが、  
四十隻もの軍船と兵力がにわかには用意できるほ  
どの強大な勢力を保持していたことが、これに  
よってもうかがえる。

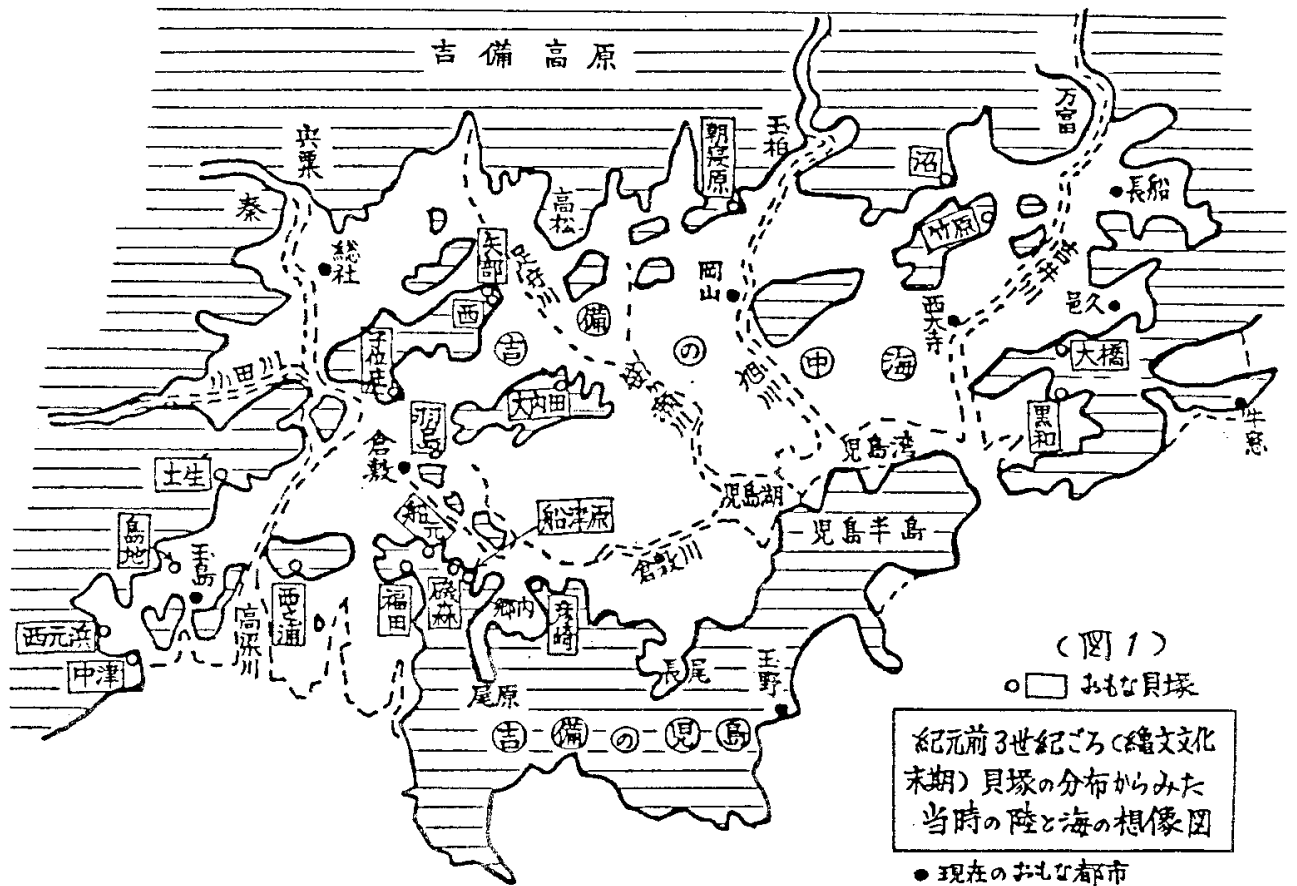
ともかくにも三世紀末から五世紀にかけて、

大和政権の確立に陰の力となった吉備氏一族の  
地盤が、現在の岡山平野の周辺地域……今から  
二千三百年から千五百年前の昔には岡山平野は一  
面の海であったと考えられている。

高梁川では秦・穴粟付近、旭川では玉柏付近、  
吉井川では万富付近まで海が大きく入りこみ、  
吉備高原の山麓を海岸線とする大きな中海があ  
ったと想像される。そして、この中海を「吉備  
の中海」又は「吉備の穴海」と呼んでいたよう  
である。（図1）

養ノ海もまたこの吉備の中海の西端に位置す  
るわけであり、吉備の中海の変遷とともに養ノ  
海の移り変わりも考えられるべきものであると  
思われる。

黒日売物語にかかわる四世紀中ごろの吉備の  
中海は、三大大河川による沖積作用によって陸地  
化が次第に南進し、現在の山陽本線沿いあたり

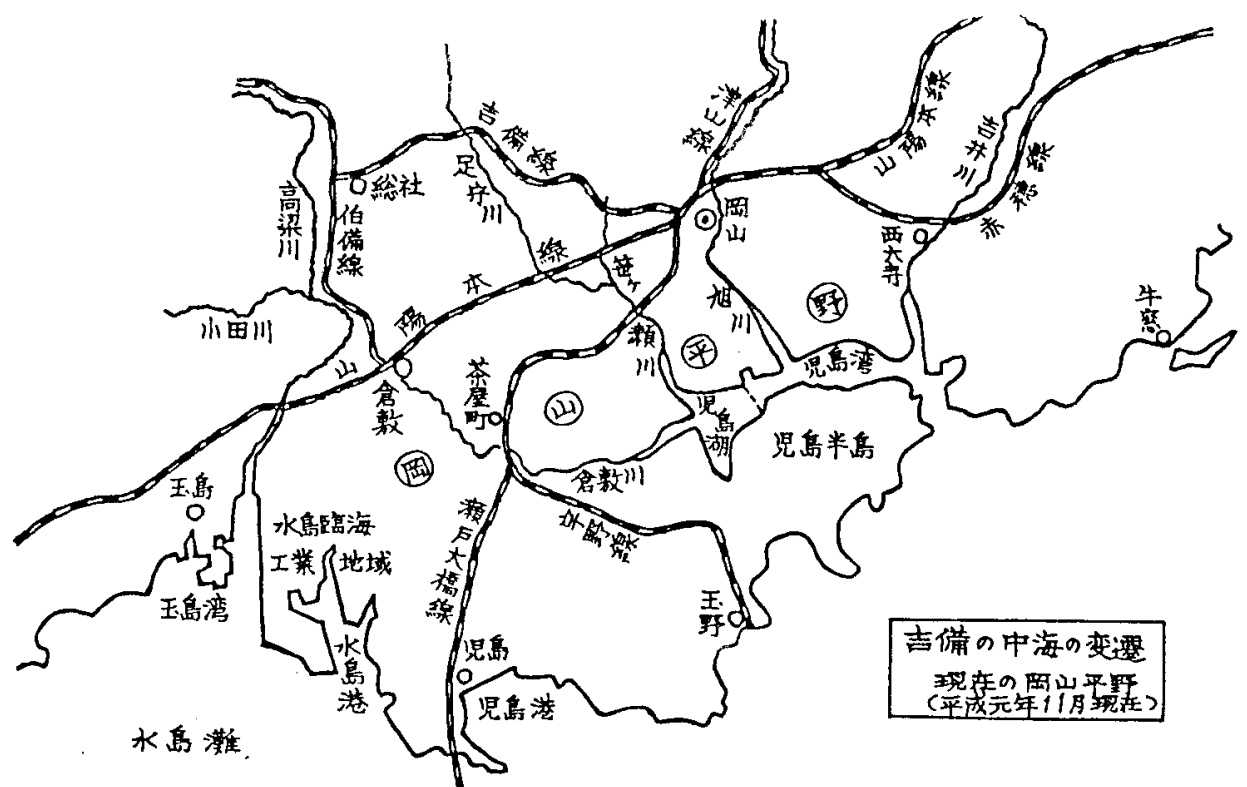


(図1)

○ □ おもひ貝塚

紀元前3世紀ごろ(縄文文化末期)貝塚の分布からみた  
当時の陸と海の想像図

- 現在のおもひ都市
- 現在の海岸線及び河川
- 白い部分は当時の海



吉備の中海の変遷  
現在の岡山平野  
(平成元年11月現在)

